

体験型短期日本語研修における課題 —レベル別対応の観点から—

城 保江・池澤明子・久木元 恵・清水秀子

要旨

本研究は、体験型短期日本語研修におけるレベル別対応の課題を事例から研究するものである。西南学院大学 2009 年度夏期日本語研修では Kolb(1984)の体験型学習のモデルに基づき、コースデザインを行い、体験型学習として季節行事参加、文化体験、旅行など約 10 種を行った。各体験に際しては、学習者は事前に調査やインタビューを行い、得た情報を発表などの形で共有した。これらの体験型学習を円滑に運営するためにはレベル別対応が要求される。まず、初級・初中級の学習者においては、達成感を与える工夫が必要で、そのためには学習目標をより明確に提示することなどが挙げられる。他方、中級・上級の学習者においては、自身の体験を効果的に表現するスキルの習得を促すことが必要となる。体験型学習の効果は、こうしたレベルごとの対処を念入りに計画することでより高まると考えられる。

【キーワード】

体験型学習 短期日本語研修 レベル別対応 達成感 アカデミックスキル

1. はじめに

西南学院大学では、2004 年度に協定校を対象にした夏期日本語研修を開始した。この研修の主な目的は、短期の日本滞在での言語体験を通して参加者の日本語学習への興味を喚起し、学習意欲を高めることであつた。そのため、「自国でできないことをやってみよう」を合言葉に、できるだけたくさんの教室外活動を取り入れたカリキュラムを実施してきた。

初年度は 3 つの協定校からの 13 名が参加し、2 つのクラスでスタートした。その後協定校が増えたことや、2007 年度に協定校以外の大学からの参加も受け入れるようになったことから、年々参加者が増加し、2009 年度は、36 名が参加した。参加者の増加に伴い、学習背景や日本語レベルが多様になってきたため、より質の高い研修内容を

目指す上で、現在実施している研修内容を見直し、どのような問題があるのかを明確にする必要が出てきた。そこで、2009年度は、初の試みとして全クラス共通の教科書を使用し、Kolb(1984)の体験型学習サイクルをもとに体験型学習を主体とした研修を行った。その上で、レベル別にどのような問題が起こるかを割り出し、体験型学習におけるレベル別対応の在り方について探究することにした。

本研究は、2009年度西南学院大学体験型夏期日本語研修におけるレベル別対応の課題を、研修の最後に実施した参加者対象アンケート調査の結果や担当教師の観察結果などから分析し考察した事例研究である。

2. 体験型学習に関する先行研究

Kolb(1984)では、学習者は体験型学習サイクルを経る事で、自律学習が促され、気づきと内省が高まると考えられている(図1参照)。体験型学習には、①体験 (Concrete Experience)

→ ②観察と内省 (Reflective Observation)

→③概念化 (Abstract Conceptualization) →④

新たな状況での試み (Active

Experimentation) のサイクルがある。また、清水・

井庭 (2006) によれば、「アクティビティ」と「振り返り」の二つの構成によって成り立つとされる。「アクティビティ」とは、ある学習目的のために用意された実験・実習、調査活動、ケーススタディ、ゲームなどの体験をさし、「振り返り」とは、「アクティビティ」での体験を振り返ることで気づきが促され、それを概念化することによって、体験から得たものを知識として吸収する活動であるとされる。

上述のような体験型学習を日本語教育のコースデザインに取り入れた報告に熊野 (2008) がある。熊野 (2008) では、国際交流基金関西国際センターにおいての短期滞在型 (6 週間) 研修で、日本での滞在の利点を最大限に生かすため、体験交流活動型を採用している。熊野は体験交流活動型コースを実施するにあたってのポイントとして三点挙げている。第一にスケジュールの段階的設定であるが、多国籍のグループ活動が円滑に進められるようなタスクの設定、タスクの難易度の段階付けなどがある。第二に、外とつなぐこととして、ホームステイや研修旅行でのインタビューワークな

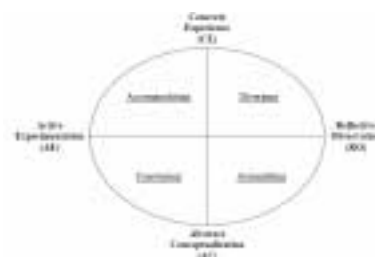


図1 The Experiential Learning Cycle and Basic Learning Styles (Kolb, 1984).

どである。そして最後に、協働と自律が挙げられている。教師はファシリテーター役に徹することで、教師主導を望む受動的な学習者から、自らの学習方法や目標をみつけ主体的に取り組む自律的な学習者への成長を促すとされる。

西南学院大学夏期日本語研修と熊野（2008）における訪日研修とでは、共通点として短期滞在型（4週間）であることと参加者が多国籍であるということがあり、学習者の自律学習を促すという側面から、大いに参考にする点がある。しかし、体験型学習はどのような日本語レベルの学習者に適すのかについては熊野（2008）では述べられていない。そこで、本発表では、日本語のレベルによって分けられた4クラス（初級、初中級、中級、上級）の参加者が体験型学習をどう受け止め、取り組んでいったかについて報告するとともに、レベル別の対応について考察する。

3. 本研修の概要

本研究が対象とする研修の期間は、2009年7月1日から31日までの1か月間であった。参加者36名を初級、初中級、中級、上級の4つのクラスに分けて実施した。全体のスケジュールは、資料1の通りである。教科書は、体験交流活動型として考案された国際交流基金の『日本語ドキドキ体験交流活動集』（凡人社）を全クラスで使用した。体験型学習の活動内容については、表1の通りである。

表1 体験学習活動内容

	活動内容	活動形式
1	日本人学生との会話セッション	クラス
2	七夕祭り	縦割り
3	書道・漫画・華道・着物の着付けの文化体験	縦割り
4	映画「おくりびと」鑑賞	縦割り
5	日本人宅訪問（ホームビジット）	同じクラスの人と3名1組
6	日本の祭り 博多山笠見学	クラス
7	長崎研修旅行 原爆資料館見学	クラス
8	社会運動家による憲法9条の講義	縦割り
9	個人プロジェクト	クラス

これらの体験交流活動は、各クラスとも Kolb(1984)の体験型学習サイクルをもとに「前活動（体験の準備）⇒本活動（体験）⇒後活動（体験の振り返り）」の順に実施した。また、2009 年度の研修の特徴として、クラス単位の体験活動の他に「縦割り」活動を導入した。この「縦割り」活動は、初級、初中級、中級、上級すべてのクラスの学習者で構成されたグループを作り、それぞれのグループ単位で活動するものである。

縦割り学習には異なる日本語レベルの学習者同士の相互作用による日本語習得促進といった効果が考えられる。ヴィゴツスキーの「発達の最近接領域理論」によれば、学習者は 教師の援助や能力の高い学習者との協力の下での問題解決を通して潜在的言語発達が促される（ヴィゴツスキー2001, 2003）。言語レベルの異なる学生と教師の少人数グループでは相互のコミュニケーションが活発になり言語力が向上することが観察されており、他の先行研究には学習者同士の教室活動、コミュニケーションの相互依存関係に関する分析（Ohta, 2001）がある。研修終了後には、クラスや体験に関する自由記述式のアンケート調査と以下の 6 項目に関する 6 件法のアンケート調査を実施した。（1）日本語が上手になった。（2）日本の文化や社会をさらに理解できた。（3）日本人と交流できた。（4）日本人と友達になることができた。（5）日本文化や生活を体験することができた。（6）いい思い出を作ることができた。

4. レベル別対応と課題

4-1. 初級クラス

a. 実施方法と内容

初級クラスの参加者は、中国、韓国から各 2 名、香港から 1 名の 5 名であった。レベルは初級前半程度で、自国で半年から 1 年程度の学習期間があり、日本語を専攻している学生はいなかった。初級クラスでは、まず合同アクティビティーに伴う初級クラス独自の学習目標（Can-do）を設定した。そして、学習目標を達成するために必要な表現や語彙を導入し、授業内で練習を行った。その後、合同アクティビティーに入った。授業で用いる教材は、適宜リソースを組み合わせで作成した。たとえば、全体アクティビティーが七夕まつりのときには、学習目標を「自分の将来の希望を単文で書くことができる」「初対面の相手に自己紹介をして、大学生活や家族のことなど身の回りのことを話して会話を続ける」と設定し、タスクレベルを初級前半に合わせる（落とす）よう留意した。教材は各種リソースを組み合わせ、参考にしながら教材化した。

また、授業のほかに毎日の日記を課した。日記には、(1) その日のできごと、(2) その日に学んだ日本語 10 項目(語彙や表現)という 2 点を必ず書き入れるよう指示した。教師は朝授業の始まる時に回収し、休憩時間にチェックをし、帰宅時に返却するという方法をとった。提出率はおおむね良好であった。今回の日記は、日本語作文能力の向上、教師と参加者のコミュニケーションツールとなり得た、その日に学んだ日本語を自分で書くことで自律学習につながったなどといった効果があった。ただ、人数が非常に少ないクラスであったから実施できた面が大きいのも事実である。

b. 参加者の反応

次に、上述のような方法で初級クラスを進めていったときの参加者の反応について述べる。本研修では、体験型学習と縦割り学習という 2 つの大きな特徴があった。体験型学習において、当初、言語的リソースのなさから体験型学習に対する戸惑いが大きかった。また、参加者間でも体験型学習やタスクベースの授業に対して肯定的な者とそうではない者に分かれ、それにより積極性も二分した。そのため、コース中、徐々に文法インストラクションの比重を上げたところ、少しずつ自信を持ち、結果として積極性も高まった。

c. 考察および今後の課題

このことから、初級の学習者に関しては、言語的リソースを十分にインプットしてから、サバイバルに臨ませるのが良いのではないかと考えられる。終了時アンケートには、初級クラスに関しては、全員がどのアクティビティーも良かったという回答であったが、4 週間というプロセスのなかでは、文法のインストラクションの比重が大きなカギを握っているように感じた。

4-2. 初中級クラス

a. 実施方法と内容

初中級クラスの参加者は、イギリス、台湾、香港から各 1 名、アメリカから 2 名、韓国から 5 名の計 10 名であった。レベルは初級後半であった。コースの始めにこの夏期日本語研修が体験型学習であることを説明し、このクラスの目的を (1) 自国で学んだ日本語を実際の場面で積極的に使うこと、(2) いろいろなアクティビティーを通して、新しい単語や表現を積極的に学ぶことであることを確認した。授業の流れとしては、各アクティビティーごとに、教科書中で対応する箇所を使用した。まず「前活

動」として、この活動の概要と目的を理解させ、語彙や表現を導入して練習させた。初中級クラスの日本語レベルは、使用した教科書の対象レベルと合致していたが、文法の説明がないため、表現や文法を理解させるためには補足として自作のプリントやパワーポイントを使用した。また、各活動ごとに教科書の語彙部分に関する小テストを実施した。次に教室外に出かけて街中で日本人にインタビューするなどの「本活動」を行い、それらをまとめて発表するなどの「後活動」を行った。縦割りのグループディスカッションでは自分の意見を発表させたりした。宿題は、活動に関連した課題と新しい単語表を自主的に作成することであった。

b. 参加者の反応

コースの最後に実施したアンケートにおける参加者のクラスに関する感想の記述を見てみると、「課題や宿題などは面白かった。」という意見がある一方、「かいわ、ぶんぼう もっとおしえてください。」「Please かいわ、ぶんぼう、おしえ中心、すごくすくなくかったです。」という意見が見られた。また、「There were a lot of assignment, but it wasn't really helpful to improve my Japanese.」と述べている学生もいることから、参加者の中には、語彙や文法を学んだという達成感を得られなかった学習者がいることが分かった。文化体験では、「漫画が難しかった」という意見は見られたものの、「It was interesting and it could be a good experience.」「華道、書道、着付け全部すばらしい経験です。」など、学習者が満足している意見が多く見られた。他方、七夕など縦割りで行った活動の中には、日本語だけだったので難しかったという意見もあり、中には実力の差を目の当たりにして気おくれしてしまった学習者もいた。

c. 考察および今後の課題

初中級クラスにおける、この夏期日本語研修に対する評価は、学習者が好む学習スタイルの違いによって二分されたようである。半数の学習者はこの体験型学習の意義を理解し、楽しみながら意欲的に取り組むことができていたが、韓国人を始めとする教室型学習スタイルを好む学習者たちには、学習意欲を喚起することができず、結果的に学習をしたという実感を持たせることが困難となった。これらのことから、さまざまな学習スタイルを持つ学習者に学習したという達成感を持たせるためには、第一に使用教科書の表現理解に付随した文法事項をより明確に表示し、繰り返し練習させることで意識化させることなどが考えられる。また、体験した活動や学習のポートフ

オリオを作成して学習成果を可視化するとともに、その作成を評価の対象にするなどの工夫が必要であるとする。

4-3. 中級クラス

a. 実施方法と内容

Kolb(1984)の体験型学習のモデルに基づき授業を進めた。使用したテキスト『日本語ドキドキ体験交流活動集』には文法学習がなく、また言語表現、語彙は既習していることが多かったので、他に中級の補助教材やインターネット教材なども使用した。参加者は中国人2名、韓国人5名、米国人1名、英国人1名、フランス人1名であった。教室內活動では文法と語彙を少人数グループに分けて課題に取り組み 参加者同士で内容について意見交換させた。小テストでは自分が覚えたい語彙のシートを作成させ、個人に合った小テストを作成した。体験授業や縦割り授業の流れとしては、(1)前活動として、本活動に必要な語彙文法などを学び、(2)体験（七夕、家庭訪問、文化体験、旅行）の後、(3)後活動では各自の体験を振り返り、その活動の課題について作文を書いて、パワーポイントなどで発表をした。また、その際には参加者全体で意見交換するよう心掛けた。例えば、長崎旅行では事前に各自の興味のある場所、特産物、歴史について各人が調べ、共通する文法、語彙などはクラス全体で学習した。そして各自のテーマに関する写真を撮影して発表した。「おくりびと」の映画鑑賞、長崎の原爆、憲法第9条などの体験活動では教師や教材が提示する「知識」を単に受け入れるだけでなく自分の考えを自分の言葉で表現するために、様々な情報を自らの知識や経験を基に分析・批判するような言語表現の学習も教室內活動に取り入れた。最後の個人プロジェクトでは自律学習を奨励し研究発表をした。この研究発表会では、日本人学生にも発表の評価をしてもらった。

b. 参加者の反応

学業成績に関してはアカデミックスキル、批判思考力を顕示できた参加者とそこまで到達できなかった参加者と半々であった。課題はきちんと完成して来た。体験型学習の授業の進め方についてアジア圏の参加者から本国の授業方法とかなり違うというコメントがあった。研修終了後の中級クラスのアンケートでは(1)日本語が上手になった、という項目に対しての満足度は他の項目に比べてやや低かった。参加者の授業についてのコメントの主なものとしては、(a) 会話が上達した (b) 個人の学習に合

ったクイズがよかった (c) 教師の援助が役に立った (d) 学生中心の授業だった (e) クラスメートが助け合えてよかったなどであった。一方、(a) プレースメントで上級に入れなかった事が残念だった (b) 観光や体験学習で前活動、後活動よりも授業での系統的な日本語学習 (文法、語彙、会話) をもったしなかった。(c) クラスメートの不真面目な態度が嫌だったなどのコメントもあった。

c. 考察及び今後の課題

体験型学習への評価については参加者の過去の学習体験の違いが背景にあるようである。アンケート調査結果から日本文化や生活の体験とその理解が深まり、日本人との交流で友人関係を築いたと感じた学生が多かったことが分かり、全体的には学生の満足度は高かったと考察する。この結果から体験型学習の意義と効果があったと考えられる。また参加者の成績の結果では 中級の学習目標も達成した。体験型学習プロジェクトについての今後の課題は、短期研修には体験交流活動が多すぎた傾向があり、次回は活動を少なくして、活動にそった文法や語彙のインストラクションといった語彙知識を高めるための活動を明示的に行う必要がある。

4-4. 上級クラス

a. 実施方法と内容

上級クラスの参加者は 10 名で、構成は韓国人 4 名、中国人 3 名、オーストラリア人・英国人・アメリカ人各 1 名ずつであった。このクラスでは、目的を「様々な体験活動を通して、日本語を使い、コミュニケーション能力と文化理解能力をのばす」こと、特に重視することを「日本語をいつも・たくさん・総合的に・知的に・場面に応じて使う」こととし、コースの最初に確認した。また、各活動に Can-do をあてはめ、参加者に分かりやすい表現でそれぞれの学習目標を示した (図 2)。

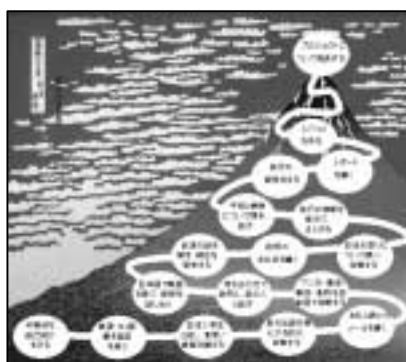


図 2 上級クラスで学習者に配布したコースの流れと学習目標

授業の流れは「前活動 (体験の準備) ⇒ 本活動 (体験) ⇒ 後活動 (体験の振り返り)」で構成した。前活動としては、体験する事柄の調査や予習・準備を宿題として行い、

授業でその成果を発表などの形で共有した。後活動としては、宿題で体験の報告や考察をまとめ、それらを授業での発表や議論の形で共有した。コース最後の「プロジェクト」では、各自が選んだテーマについて調査し、レポートとレジュメ（パワーポイントなど）を作成して、発表会を行った。

毎日、体験の準備と振り返りに相当する宿題があったが、他にも毎日の課題として「今日のことば 20」（各自が新しく学んだ単語や表現をリストする）と「日記」（言語と文化社会に関して新しく学んだことを書く）を課した。余裕のある参加者のためには、「今日のニュース」（ニュースを一つ選び、要約と感想を書く）という選択課題を提案した。また、各活動のための言語素材をまとめて、プリントの形で配布し、参加者が各自の日本語レベルと学習スタイルに応じて自習できるようにした。

上級クラスでもコース共通の教科書を配布したが、提供されている言語素材はやさしすぎるので、活動の枠組みと体験に関する情報や様式を提供するものとして使用した。他には『日本語上級話者への道』（荻原ほか 2005）、『トピックによる日本語総合演習テーマ探しから発表へ 中級前期』（佐々木ほか 2009）、『J. BRIDGE to Intermediate Japanese』（小山 2009）から、体験活動の話題に合わせて一課ずつ使用した。

評価は、出席と授業参加、すべての提出物と発表に対して行い、それらに小テストと最終テストの結果を加えた合計点で成績を出した。毎週初めの小テストは、前週の言語素材と参加者本人の「今日のことば 20」から出題した（つまり、参加者ごとに小テストの内容は異なる）。最終テストは、コース全体の言語素材と「今日のことば 20」から出題した。また、授業担当者と一対一で話す会話テストも行った。

なお、授業の初日と最終日に、授業担当者と各参加者の一対一でカウンセリングを行った。各人の日本語の課題、強み・弱み、学習スタイル、コースに期待すること／コースの振り返りと将来の日本語学習計画などについて話し合った。また、コースの最後には授業に関するアンケート調査を行った。

b. 参加者の反応

体験活動も課題も数が多く、多忙なスケジュールであったが、参加者はきちんと課題をこなしていき、積極的に活動に参加した。複数のアンケート調査結果（大学によるもの、日本語クラス共通のもの、担当者によるもの）を照らし合わせると、各結果は同傾向を示しており、参加者は概ねコース内容と成果に満足していたと言える。

コース共通のアンケート調査の結果 (N=10、ライカード評価基準:6 が最高) では、(1) 日本語が上手になった (M=3.8)、(2) 日本の社会や文化をさらに理解できた (M=4.8)、(3) 日本人と交流できた (M=4.8)、(4) 日本人と友達になることができた (M=4.7)、(5) 日本文化や生活を体験する事が出来た (M=5.1)、(6) バケーションを楽しむ事ができた (M=5.5)、(7) 思い出を作ることができた (M=5.4) であった。中級クラスの結果と同じ傾向が見られた。

担当者がクラスでとったアンケートでは、コース中の各活動に対する評価をきいた。

クラスの目的に関してみると、ほぼ全員が「コミュニケーション能力」、「文化・社会を理解する能力」ともに上がったと感じていたが、後者がより上がったと感じている参加者が多かった。「日本語を、いつも・たくさん・総合的に・知的に・場面に応じて、使う」に関しては、参加者は全体的に「日本語を使った」と思っていたが、「とても」より「まあまあ」の方が多かった。「とても」の方が多かったのは「たくさん使った」のみで、「知的に使った」で「とても」が最も少なかった。質的により量的に使ったと意識されていた。

クラスでまたは他のクラスと合同で行った活動すべてについて、「ちょうどよかった」「もっとあればよかった」「もっと少ないほうがよかった」「ないほうがよかった」のいずれかにチェックしてもらったところ、全体に概ね「ちょうどよかった」と言える結果になったが、考慮すべき項目もいくつかあった。

まず、課題が多すぎるという反応を予測していたが、課題の量はちょうどよかったようだった。記述式回答でも「忙しかったけど、勉強になったからよかった」という肯定的な感想が散見された。

クラスで行った活動に関しても「少ない／ないほうがよかった」活動はなかったと考えてよい結果になった。体験交流活動に直結した項目、「それぞれの行事の準備」(＝前活動)と「それぞれの行事の発表」(＝後活動)は、殆どの参加者が「ちょうどよかった」と答えた。最後の「プロジェクトワーク」の準備と発表に関してもほぼ同様である。つまり、体験交流活動型というコースのあり方は支持されたとと言えるだろう。体験交流活動のテーマに関連した項目の結果からは、文化・社会・歴史を深く扱ったことは歓迎されており、今回以上を望む参加者もいたが、平和・戦争に関するテーマは意見が分かれた。扱いに注意が必要なテーマだと言える。

いわゆる教室学習型の活動に関してみると、「日本語のまちがいの説明」は「ちょう

ど」と「もっと」が半数ずつ、「文法の勉強」は「ちょうど」より「もっと」が上回り、いずれも「少ない／ないほうがよかった」という回答はなかった。「敬語の勉強」も「ちょうど」と「もっと」がほぼ半数ずつであった。体験交流活動型が支持されると同時に、教室学習型活動への期待もあったことが明らかになった。

コース全体で行った活動に関しては、「縦割り」と「社会運動家による憲法 9 条の講義」で評価が二分された。しかし、前者は肯定的な評価の方が多く、後者は否定的な評価の方が多かった。方法とともに今後の重要な課題である。意義深い活動でも、深刻で複雑なテーマは、全員が十分に使える媒介語の使用を前提としないコースには向かないのではないかと筆者は考えている。他の全体活動は概ね「ちょうどよかった」と評価されていた。

c. 考察

全体にコースおよびクラスに関する満足度は高く、目的も達成したと言えるが、10名の参加者中1名が「クラスレベルが合わなかった」と考えており、日本語能力の伸びの実感が乏しいようだった。筆者は、この参加者に合わなかったのは「クラスレベル」というより「体験交流活動型学習」だったのではないかと考えている。いずれの参加者もそれぞれ技能に強み・弱みは持っていたが、他の参加者は弱みを強みで補いながら、積極的に活動することができており、達成感を感じていた。この参加者が他の参加者と異なる点は、調査や発表に必要な基本的なアカデミックスキルが十分でないことと、扱われているテーマに対する興味が低いことであった。この条件下では、中級クラスに行っていても問題は残ったと思われる。

d. 今後の課題

今後の課題として考えられることは、プレイスメントテストで測りにくい話す能力およびアカデミックスキルの調査とそのクラス分けへの反映（どの能力を優先して考慮するかは、本人との話し合いが必要かもしれない）、弱み（特にアカデミックスキル）に対する手当て、テーマにあまり興味がなくても参加する意義を見出せる工夫である。

また、参加者の期待に応えたければ、いわゆる教室型学習の存在感を高める必要がある。例えば、体験交流活動を少し減らして教室学習の時間をとる、スケジュール表や体験交流活動のための教材にもっと文法項目を盛り込むなどの方法が考えられる。

それから、本コースが体験交流活動型であることとその意義を参加者に周知徹底する必要がある。それは大学の事務レベルでも行われるべきであるが、クラスでも意識

化する時間をさらにとり、より有効な方法を検討してみたい。

いくらコースが「体験交流活動型」と謳っていても、現実には殆どの参加者は「協定校のプログラムである」「日程や費用、開催地が都合に合う」という理由で申し込む。そして、無意識に持っている「文法学習こそ日本語上達の方法」という信念でコースと成果を批評することが起こりがちだ。その現実に対する多角的な対策が上級レベルでも必要であるようだ。もちろん、体験交流活動そのものをより充実させていくことも重要である。

5. まとめと今後の課題

本研究の目的は、体験型研修においてレベル別にどのような問題が生じるかを探り、レベル別対応の在り方を明らかにすることであった。研修後に実施したアンケートや担当者の観察により各レベルに共通して浮かび上がった特徴は、日本語が上達したという参加者の満足度が文化体験などの活動に対する参加者の満足度と比べると低かった点である（図3）。

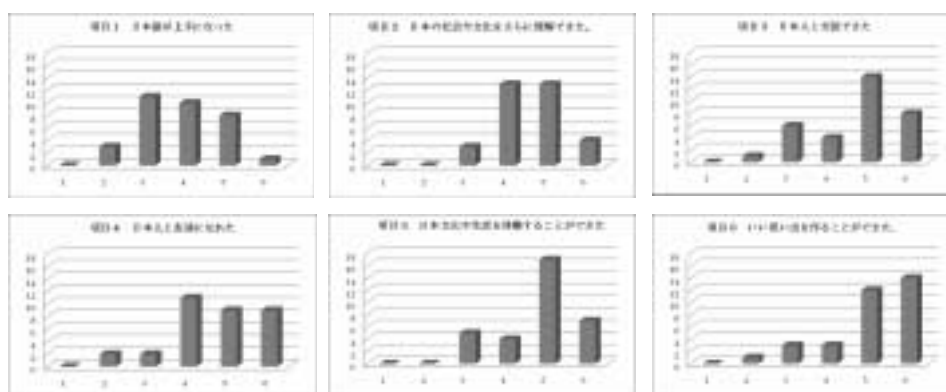


図3. アンケート項目別回答数

(6件法 1：まったくそう思わない 6：とても思う)

このことは、参加者が好む学習スタイルの違いが影響していると考えられるものの、体験型学習を成功させるための重要な方向性を示唆している。つまり Kolb(1984) Experience) の①体験 (Concrete Experience) ②観察と内省 (Reflective Observation) ③概念化 (Abstract Conceptualization) ④新たな状況での試み (Active

Experimentation) のサイクルの中で、いかに言語素材を導入し参加者に達成感を与えるかが体験型学習の成功への鍵と言える。このことから、体験型学習をさらに効果的に実施するためには、1. 言語的リソースにおける関連した文法事項などを明確にし、前活動で十分にインプットすること、2. 学習成果を視覚化できるようにポートフォリオなどを作成させ達成感を与えること、3. 活動過多のスケジュールを改善し、教室学習型活動の存在感を高めることなど、参加者自身が体験交流活動の意義と学習達成感を認識できるように工夫することが重要であると考えます。

今後は本研究で明らかになった点を改善しながら体験型研修を実施し、体験型研修における学習者の言語学習に関する満足度と学習スタイルの関係などについて研究を進めて行きたい。また、本年度の研修の特徴の一つである「縦割り」活動については、それについての参加者の意見を問う質問項目を設けなかったため問題を明確にすることはできないが、活動後の参加者の声や担当者の観察によると、今回の「縦割り」はレベル差が大きすぎたと思われる。今後は初級と初中級、中級と上級の二組に分けるなどのレベル差を考慮した縦割り活動を行い、縦割りの相互作用による日本語習得の効果についても調査する予定である。

付記

本稿は 2010 年度日本語教育国際研究大会で発表した内容に加筆したものである。

参考文献

- (1) 荻原稚佳子ほか (2005) 『日本語上級話者への道』スリーエーネットワーク
国際交流基金関西国際センター編 (2008) 『日本語ドキドキ体験交流活動集』
凡人社
- (2) 小山悟 (2009) 『J. BRIDGE to Intermediate Japanese』凡人社
- (3) 熊野七絵 (2008) 「大学生短期訪日研修における体験交流活動型のコースデザイン」
広島大学留学生センター紀要 第 18 , 31-46
- (4) 熊野七絵 (2009) 「短期訪問コースのための教材開発ー日本語ドキドキ体験交流活動集ー」 国際交流基金 日本語教育紀要第 5 号, 135-149
- (5) 佐々木薫ほか (2009) 『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ
中級前期』スリーエーネットワーク
- (6) 清水崇博, 井庭崇 (2006) 「体験学習におけるファシリテーションのパターン分析」

情報処理学会第 58 回数理モデル化と問題解決研究会

- (7) 土井捷三 神谷栄司訳(2003) ヴィゴツキー『「発達の最近接領域」の理論』三学出版
- (8) Kolb, D. (1984) *Experiential learning: Experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs: Printice-Hall.
- (9) Ohta (2001) *Second language acquisition process un the classroom: learning Japanese*. Lawrence Erlbaum Association Publishers.
- (10) Vigotsky, L. (1986) *Thoughts and Language*. Cambridge: MIT Press (柴田義松訳『思考と言語』新読書社, 2001)

資料 1. 全体スケジュール

	午 前(AM)			午後(PM)		
	9:30～	10:40～	11:50～	14:00～	15:10～	16:20～
7/1	プレイスメントテスト 終日					
7/2	オリエンテーション キャンパスツアー 歓迎レセプション					
7/3	市内見学（福岡タワー、キャナルシティ、櫛田神社、博多町屋ふるさと館 楽水園）					
7/4	自由					
7/5	自由					
7/6				コース説明＆自分の事を話そう		
7/7				縦割り作り	ビジター会話	七夕
7/8	文化体験講座(着物着付け・華道・書道・漫画)				HV 対面式	
7/9	フィードバック	E メール書き	PCRRoom	映画「おくりびと」鑑賞会		
7/10	映画鑑賞フィードバック(縦割り) ホームビジットの準備				武道について	武道見学
7/11	ホームビジット（午後2時から2時間程度 市内の日本人家族宅訪問）					
7/12	自由					
7/13				ホームビジットフィードバックお礼の手紙		
7/14	日本の祭り、年中行事、その他					
7/15	山笠見学					
7/16	祭り発表	長崎旅行準備				
7/17	旅行準備	憲法9条講演	平和学習			
7/18,	長崎研修旅行					
7/20	自由(海の日)					
7/21	市内見学（太宰府天満宮、九州国立博物館ほか）					
7/22				旅行報告会	平和学習フィードバック	
7/23	プロジェクトワーク			CALL ROOM		
7/24	プロジェクトワーク			CALL ROOM		
7/25	西新校区夏祭り（任意参加）					
7/26	自由					
7/27	プロジェクトワーク			CALL ROOM		

7/28	プロジェクトワーク	CALL ROOM	
7/29	プロジェクトワーク発表会 ビジター会話		
7/30	試験		
7/31	自由	終了式 13 : 00 / 歓送レセプション 14 : 00	

(城 保江-佐賀大学留学生センター)

(池澤明子-西南学院大学留学生別科)

(久木元 恵-国際交流基金クアラルンプール日本文化センター)

(清水秀子-(コロラド大学ボルダー校)